

氏名	加藤 みつこ (かとう ミツコ)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第17号		
学位授与日	平成20年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	墨線上の出来事		
審査委員	主査 教授	島 尾	新
	副査 教授	佐 藤	晃 一
	副査 教授	米 谷	清 和
	副査 成城大学 教授	相 澤	正 彦

内 容 の 要 旨

「描かれるもの」がある。「描くもの」ではなく「描かれるもの」が。それを、制作者は画面に表出させる。

美術における「制作行為とは、何処で始まり、何処で終わるのか」「制作・作品とは何なのか」。私はこの数年間「墨」を制作の中心として使用してきたが、それらの根本的な疑問に対する答えを探すなかで、制作行為の中に「描かれるもの」と自分を繋げるための時間が多いことに気が付いた。そこには常に、「記憶」「道具」「行為」というキーワードがあった。

「記憶」は、幼い時の記憶である。私はよく「縁の下」に潜ったが、その温度、湿度や匂い、自分の目線などが体の深いところで体感として残っている。それは、どこかぼんやりとした「墨色」の記憶なのである。

「道具」は、「墨」と「硯」である。墨は、絵画の世界では特別な存在として、長い歴史の中で生き続けている。この「墨」の精製法と歴史を見る中で、それが植物、動物、そして人の手という生き物の恩恵のもと出来上がっていくことを実感した。この墨を墨液にするためには「硯」という道具が必要である。その「墨」、「硯」に水を加えて「磨る」ことによって墨液は出来上がる。この研ぎ澄まされた時間は、身体にどのような影響をおよぼすのか。特に脳で何が起きているのかを知るために、脳活動の測定実験を行った。その結果、墨を磨っているときの私の脳は極めて高い安定状態にあることが分かった。それは「身心一如」とも言い得る状態であり、それを支えるのは、体と心を区別しない「身(み)」であると感じられた。そのなかで「描かれるもの」はどんどん私に輪郭を見せてくるのである。

この「制作過程における中間領域」といえる場を考えるに当たって、「墨を磨る」という営為そこで出来た「墨液」と、「縁の下」という空間には共通するものがある。「縁の下」は、家屋と大地の間に存在する。それは、内界とも外界とも言えず、大地（＝無為）と家屋（＝有為）の中間領域である。では「墨を硯で磨る行為」と「墨液」とは、どのような中間領域なのか。

「描かれるもの」（＝大地・無為）と「作品」とを結ぶ制作行為の中に、それは存在する。「墨液」を作る目的ではあるが、私が言う「墨を硯で磨る行為」は少し違う目線から捉えているのである。植物、動物の恩恵のもと人が作った「墨」と、「硯」という地球の大地が長い時間をかけて生成してきたものの間を、水を加え、行ったり来たりする行為なのである。その中間領域は、完全な無意識の状態でもなく、徐々にその「描かれるもの」が「波動」として伝わり、あくまでも「描く」に繋げるのである。墨絵の持つあの独特の「波動」は、「描かれるもの」を引き寄せるときの「波動」も影響しているのである。その「墨を硯で磨る行為」を行う私と、「縁の下」にいた私とは似通った感覚なのである。その「縁の下」での記憶を持った身で「墨液」を作る。墨液と私は似た思想を持っていると言える。

その行為を経て画面に「描かれるもの」が現れはじめる。これら道具、行為の思想を経て「描かれるもの」との吸引力を高める、その吸引力を波動としてとらえ、画面の上で葛藤し、「作品（墨絵）」というものが表出される。それは画面上での出来事。

私は「描かれるもの」、「道具」、「画面」の声を聞き、思想し、その出来事のすべてと常に関わるのである。そして、作品として姿を変え現れる。

本論文では、第Ⅰ章で、これまでの制作・作品が私に与えた根本的な問いに答えるためのキーポイントを明確にした。先にも述べた「縁の下」「描かれるもの」「墨を硯で磨る行為」などは修了制作時に記した制作ノートの中にあっただ。第Ⅱ章では、「墨」「硯」の歴史と生成の仕方、自分との関わりを「道具の思想」として述べた。第Ⅲ章では、それらの道具を手にした時に起こる「行為」について取り上げて、「体」と「心」との関係で捉え直し、自分の行為を見つめ直した。これらのことが関わり合い「描かれるもの」へと繋がり画面に表出される過程では、常に「波動」が感じられた。制作の中で起きる出来事の「波動」は、様々に姿を変えながら、螺旋的に繰り返されるように思われた。第Ⅳ章では、この「波動」について、作品を作り上げるまでの段階を追う中で述べて、第Ⅰ章の問いへの答とした。